

僕はだいたい朝早いのは得意じゃない。

そもそも、早起しなくちゃならないというルールはないはずだ。布団の上に寝っころがっていると、じつに気持ちがいいし、いつまでもそうしていたい気分になる。

人はそんな僕に対してとにかく冷たい目をむけたがる。僕はもう少しごろごろしてきたいのだけれど、僕の一日は同居しているじーじに蹴^けっ飛ばされていやおうなしに始まる。

僕の名はサダハル、この家に住んであげている猫だ、毛並^{けな}みは黒々としている、そんなに若くはないけれど…。

僕が朝早くたたき起こされるのは、じーじが朝早く起きるせいなのだ。いつも僕はじーじの布団^{ふとん}のすみっこで寝ている訳なので、じーじが起きると同時に布団をひっぺがされるといったあんばいなのだ。

僕はじーじにたたき起こされると、まず毛づくろいをする。そうしていると、だんだん目が覚めてくる。それから床に爪^{ゆか}を立てて背伸びをする。以前は畳の上でやっていたのだが、畳でバリバリやっていると追い出されてしまった。そっちのほう^{だんぜん き も}が断然気持ちがいいのだけれども。

じーじは朝起きると、決まって近くの公園まで散歩に行く。
そして、その辺りをひとまわりして帰ってくる、そうすると
朝ご飯にちょうどいい時間になる。とはいっても、じーじが
自分で朝食をつくるわけじゃない、帰った頃にそれができ上
がっているという算段さんだんなのだ。

僕は、じーじが散歩に出かけているあいだに、もう一眠りひとねむ
しようとするのだが、どうもうまくいかない、欠伸あくびばかりし
ている。

そのうちに、近所に住むちーちゃんがやってきて、朝ご飯
の用意を始める。しばらくするとじーじが帰ってくる、そう
いう日課なのだ。

「パーパ、今日はパン食だけどいいよね」

「えーっ、俺がちーちゃんの作るものに文句を言ったことが
あるかい？」

じーじは、出されたものをいつも通りきれいにたいらげる。

しかし僕はパンなんかきらいだ。ミルクでふやかしたパン
なんかより、焼き魚か、少なくとも鰹節かつおぶしごはんのほうが好
きた。

ちーちゃんは千絵子^{ち え こ}といって、近所に住んでいるじーじより随分若い女性だ。しかし、パパなどと甘ったれた声で呼んでいるからといって別に愛人ではない。

ちーちゃんはじーじの二番目の娘だ。毎日、じーじの朝ご飯と晩ご飯を、父親のために作りにやってくる、そのついでに僕の食事も作ってくれるといったぐあいなのだ。

僕が住んでいるのは、もう六十年以上たった古めかしい家だ。いまだに街^{まち}の真ん中にこんな家があること自体めずらしい、と僕は思う。

僕は、そのおおよそおいしくないパンミルクをたいらげると、外に出かけることにした。

ちーちゃんは、僕がパンを平らげた皿を見て、満足そうにかたづけはじめた。やはり、僕もじーじと同じように愛想を振り撒いているらしい。

僕は、そんなじーじとちーちゃんを尻目に、家の外に出た。

外に出ると、そこら辺り^{あた}は下町のビル街で、僕はさっさと抜け出そうと足早^{あしはや}になる。突然、横っちょからフォークリフ

トが飛び出してきて、道路を挟んだ工場を行き来したりする。
危険きわまりないはなしだ。

僕の目的は近所の商店街だ。そこを^{さんさく}散策するのが僕の楽しみなのだ。なにしろ、うまくすればその辺で食べ物をなげてくれる。

僕はいつも通りに工場の横の^{ろじ}路地を抜けて、商店街に出た。路地といっても、ぼくにとっての路地なだけで単なるビルのすき間だ。

商店街は朝の買い物をする客でにぎやかだ。僕はいつもどおりに、魚屋、肉屋、^{かんぶつや}乾物屋の辺りをウロウロする、佃煮屋と甘いものは^{けいえん}敬遠する。佃煮は辛すぎるし、スイーツ類は甘すぎるのだ。僕らに塩分、糖分はいらない。

魚屋の前で待っていると、派手な格好をした、どこかのおばさんがやってきて魚を選びはじめた。

まるで^{じょうたろう}常太郎のママのようだ。見栄っ張りで、あれこれブランドに身を固めている、魚の血でもついたらどうするんだ。と、僕はいらぬ心配をしてやっている。

そもそも、常太郎のママといえは、なにかと^{ていさい}体裁を気にし

たがる。今日の髪型はどの、出かけるときの帽子はどうする、バッグは、アクセサリは。果ては、二歳の息子の常太郎のファッション、髪型にまで気を配る。

当^{とう}の常^{じょう}太郎^{たろう}は、頭に大汗をかいてしきりに頭^かを掻いている、そうして、そのうちにだんだんと目が吊^つり上がってくる。

僕はいつも気の毒に、と思っている。本人はいつそのこと丸坊主にしたいと思っているにちがいないのだ。

おっと失礼、常太郎というというのは、じーじの長男の息子で近所に住んでいる悪ガキだ。誰も知らないが、僕たちは意外と仲がいい。

「ちょっと、これくださいな」

派手なおばさんは、一匹の大きな鯛^{たい}を指さして店のおじさんに声を掛けています。

「あいよ！」

店の店主であるおじさんは威勢^{いせい}よく答え、手際よくそれをレジ袋に入れ、ナイロン袋に詰めた氷をほうりこんだ。

その間、僕はおばさんをまじまじと見あげていたもので、振り向いたおばさんと目が合ってしまった。

「あら、かわいい猫ね。ここの猫？」

「えっ、ああこの猫ですか、こりゃ近所のやつですよ」

店主はふいをつかれて、はじかれたように答えた。

「ふうん、それにしちゃあうまくここに^{おさ}収まっているじゃない」

派手なおばさんが帰った後で、店のおかみさんがその後姿を見送りながら、「ちょっと、あんた、あんまり猫が魚屋の
^{みせさき}店先に居るのもどうかと思わない」と迷惑そうに僕を見た。

「仕方ねえだろ、秋山さんとの猫なんだし、だいたい^{しんいち}真一がへんに甘やかすからいけねえんだよ」

主人は、今日は休んでいる店員の名前を引き合いに出した。

「さあ、今日は真一はいないからさっさと帰りな」

おかみさんはそう言うと、^{てい}体よく僕を追い払った。

なんだというんだ、僕は乞食じゃない、こんなところの魚なんか食べなくても、じーじの家の魚の方がよっぽど^{おい}美味しいんだ。

そういきまいてみても、ちーちゃんが買ってこなければ家に魚なんて無いんだけど。

だから僕はこうやって商店街をうろついている訳なので、
ちょっと悲しい現実があるのだ。

どうも今日は調子が悪い。

僕は、いさぎよく商店街の散策^{さんさく}に見切りをつけて、近くの
河川敷^{かせんじき}まで足をのぼすことにした。

午前中とはいえまだ九月なので日差しはきつい。河川敷ま
で出かけるのはかなり苦勞がいるけれど、とりあえずそれが
僕の散歩コースなのだ。

川沿いの道を歩いていると、向こうからおじさんが歩いて
来るのが見えた。おじさんはひょこひょこことがに股^{また}で歩いて
くると、僕の前で立ち止まり、しゃがみこんだ。

「クロ、元気だったか」

おじさんは、そう言いながら人差し指を立てて僕の喉^{のど}をか
るくくすぐった。

僕はちいさくニャアと鳴いてみせた。

「ああそうか、腹が空いてんだな、そういやあなにかあった
かな」

おじさんは僕を抱きかかえると、立ち上がってまたひょこ

ひょこ歩きはじめたのだった。

河川敷の隅^{すみ}に置いてあるくたびれたワゴン車までくると、おじさんはごそごそとポケットをまさぐって鍵を取り出し、車の横ドアをあけた。僕は、開いたドアからするりと中^{はい}に入り込んだ。

おじさんは耕平^{こうへい}さんといって、この車の持ち主で、この車に住んでいる。耕平さんは実にみすぼらしく、髪は天然パーマで長く伸ばしている、というより散髪にいかない。見かけはほとんどホームレスだ。いや、この車が家と呼べる代物でないとすれば間違いなく彼はホームレスなのだ。

耕平さんは、この動くか動かないかわからない、少なくとも僕はこの車が動いたところを見たことはないのだが、車に住んで毎日仕事に行っている。

彼の仕事は車の廻送^{かいそう}だ。中古車やら新車やらを、あっちこっちに移動させる仕事らしい。

耕平さんは隅っこの冷蔵庫の中をのぞき込んでいる、そもそこの冷蔵庫の電気はどこからとっているのか、甚^{はなは}だ疑^ぎ問^{もん}なところだ。

「あっ、あった、あった」

耕平さんは、冷蔵庫の中から魚の干物を一枚ひっぱり出してきて、僕に放り投げた。

僕は、一応あたりを警戒^{けいかい}するように首をまわしてみせてから、そのアジの干物にかじりついた。正直、パンだけではおなか^{なか}が空いていたので、有難いはなしだったのだ。

耕平さんは、歳は四十前後で思ったよりも若いが見た目は薄汚^{うすよご}れていて、だいいちめったに風呂に入らないのでひどく臭^{にお}う、いきおい顔も黒くくすんでいて大きな目だけがきょろきょろとしている、といった印象だ。彼は僕のことをクロと呼んでいる。黒猫だからクロで、シンプルな発想なのだ。

「クロ、僕は来月からしばらく沖縄に行くからね、留守だから来てもだめだぜ」

耕平さんは僕の背中をなでながら話しかけた。

「むこうの友達が寂しがるから、時々は行ってやらなくちゃな、僕が行くとみんなが喜んでくれるんだ。だから僕は半年に一度は沖縄に行くのさ」

耕平さんはうれしそうに笑った。



ワゴン車は木陰に止めてあるので、この時期意外と涼しい。
窓は開け放してあるので風も入ってくる。

僕は、耕平さんの話を聞きながら少し眠くなってきた。

「そうだ、体も洗っとかなくちゃ。このまんまで行くと、む
こうでみんなに風呂に放り込まれちゃうからな」

耕平さんは、自分がどうして沖縄へ行くようになったかとか、海がとってもきれいだとか、長々と話した。

僕はその辺でうつらうつらして、時折大あくびをしたりした。

^{こうへい}
「耕平、おーい耕平」

外で誰かが呼ぶ声で僕は目が覚めた。

耕平さんは話をやめて、大きな目をきょろきょろさせ、腰を浮かして中腰のまま入口まで出ていった。

「ああ、耕平いたのか」

外には、ちょっと小太りのブルドックのような顔をした五十がらみの男が立っていた。少し荒い息をしているところをみると、急いで小走り^{こばし}気味にやってきたのだろう。

「なに？」

耕平さんは口ごもった。

「ちょっと急いで三瀬自動車まで車を持って行ってくれ」

「今日は俺は休みだけど」

耕平さんは不明瞭^{ふめいりょう}にしゃべった。

「わかってるが、他に誰もいねえんだよ、お前、来月休みと
るんだろう」

耕平さんは暫^{しばら}くためらっていたが、小さくわかったと言
って、ワゴン車の中から肩掛け^{かたか}鞆^{かばん}をとってくると、ひょこ
ひょこと歩いて行った。

小太りの男は耕平さんの会社の社長らしい。

「あいつを遣^やると、車ん中^{くせ}が臭えってみんな嫌がるんだけど
な」

社長はぶつぶつと小声でつぶやくと、軽くため息をついた。

その日は、夕方じーじの長男一家がやってきた。

長男と、その嫁、つまり常太郎^{じょうたろう}のパパとママだ、そして
悪ガキの常太郎とだ。じーじと一緒に外食をするつもりらし
い。

すると、僕はまたキャットフードということになるらしい、面白くない。

じーじと長男夫婦が話している間、僕は常太郎と隣の部屋で遊ぶことになった。

常太郎は僕の尻尾^{しっぽ}をつかんだり、体を持ち上げたりと大忙しだ。意外とこいつは力持ちだ。

「ニャンニャン」

常太郎はたどたどしい言葉で僕によびかける。

「いいかげんにしろよ」

僕は常太郎に言った。

常太郎は、キョロキョロとまわりを見て、すぐそばに誰もいないのを確認すると「なんだよ」と明瞭^{めいりょう}な言葉で言った。

「ひとの尻尾^{しっぽ}をやたらに引っ張るんじゃない」

「いいじゃないか、へるもんじゃなし、だいいち僕は赤ん坊なんだから色んな事に興味^{きょうみ}があるのさ」

「君ぐらいになると、もう赤ん坊とは言わないんだよ」

僕は常太郎に言ってやった。

常太郎は、まだ小さいくせになんでも喋^{しゃべ}る、そしてそれ

を誰にも知られないようにかくしている。その他にも特別な能力を持っているらしい、自意識過剰なへんなやつだ。

まあそれを言うなら、この僕もこいつと話ができるへんなやつということになる。そもそも、ぼくはこの秋山家の歴代の猫の中で、最もバカ猫だという有難くない評価を得ている。何を根拠にこの連中は僕にそう言うのだ、はなはだ遺憾で許しがたいのだ。

常太郎達は、僕をほったらかしてさっさと外に出て行ってしまった。まあそれならそれですっきりする。

僕は、庭へバッタでも捕まえに行こうかとも思ったが、もともと飼い猫で育った僕は、バッタなどはあまり好きではないのでやめた。

しかたなく、僕はその日はキャットフードを食べて寝ることにしたのだった。

十月に入って、耕平さんは沖縄へ行ってしまった。主が居なくなったワゴン車は、こころなしか幾分寂しげで、増々くたびれて、あたかもスクラップがそこに置いてあるかのよ

うにさえ見えた。

などと、あらためて言わなくても、大抵^{たいてい}の人は、はなから
そう見えるだろうけれども。

僕は、耕平さんが居ない間、よくそのまわりの草叢^{くさむら}でゴロ
ゴロしていた。ちょうどいい季節なので、その辺の虫を捕ま
えて遊んだ。断わっておくが決して食べるためではない、僕
は上品な猫なのだ。

十月も半ばに入り、僕はいつものように耕平さんの車の近
くで寝そべっていた。

そうしていると、道路の方から男が二人やってきた。男達
はカッターシャツに、ネクタイこそしていないが名札のよう
なものを首に掛けている、いかにもサラリーマンといった風^{ふう}
情^{ぜい}だ。

男達は耕平さんの車の前で立ちどまった。

「これですか」

一人の男がもう一人の男に聞いた。

「そうなんですよ、随分^{ずいぶん}以前から置いてあるんですよ」

「持ち主はいないの」

「見たことないですね」

二人の男は耕平さんの車の周囲を回りながら、車の中をのぞき込んだ。

「よく見えませんね、誰かが居るということはないでしょう」

若い方の男は、そう言って^{あた}辺りをぐるっと見回したので、自然と僕の姿が目に入った。僕を見ると男は、にやっと笑った。あまり上品な笑いじゃないな、と僕は思った。

「こいつぐらいかな」

「こんな野良猫が住み着いてるぐらいじゃ、誰もいないに決まってますよ」

若い男は年配の方の男に向かって言った。

失礼な、僕は野良猫じゃない。

「いずれにしろ、早く片付けておかなくちゃいけないな、来月には大事な外国のお客さんがくるんだからな。ほとんど泥^{どろ}縄^{なわ}だよ」

若い男は急にかしこまって、はあ、とあいまいに^{うなづ}頷いた。

男達は、A4大^{だい}の紙を出してきて、太めのマジックでなに

やら書いていたが、書き終わるとそれを耕平さんのくるまのドアに貼り付けた。

「こうやっておけば、もし持ち主が居れば連絡して来るだろう」

僕に字は読めないが、男達は役所の人間らしかった。話の内容から、一週間後に耕平さんの車を捨てるらしい。僕は困った事になったと思った。と同時に耕平さんのあわれな姿が目に見えた。

男達が帰ってしまうと、僕も帰ることにした。そのまま家に帰るのも早いような気がしたので、途中で常太郎の家に寄ることにした。

常太郎の家は、家といってもマンションなのだが、帰り道の途中にあった。途中だが、かなり大まわりしなくちゃいけないので、途中でもないといえそうでもなかった。

僕はマンションの急な階段を登ると、常太郎の家の玄関の前でニャアニャア少々うるさい声で鳴いた。

中で常太郎が気づいて、ドアの前まで出ていったので、常太郎のママが何かしらと思ってドアを開けた。

「あら？」

と言ったきり、^{しばら}暫く僕をじろじろ見ていたが、
「サダハルじゃないの、珍しいわね」

そう言ったママの横をすり抜けて、僕は家の中に入り込んだ。

珍しいも何も、僕はこんな家に来るなんて初めてなんだ。
「ちょうどよかったわ、ちょっと外に出てくるからサダハル
と遊んでてちょうだい。十五分程で帰るから」

ママはいい^{ぐあい}具合
だというように、
そそくさと外に出
て行ってしまった。
いつも一緒に行く
と言って駄々をこ
ねるうるさい息子
が、何も言わない
のを不思議に思わ
ないのだろうか、



おめでたい性格だと僕は思った。

「なんの用だい」

常太郎は僕に言った。

「用がなくちゃあ、来ちゃいけないのか」

ぶっきら棒な言い方に僕は言い返した。

「なにを言ってるんだ、用もないのに来たくもないところに
来るわけないだろう」

僕がいつ来たくないと言ったのだ。

僕はちえっと舌打ちすると、事のあらましを話し始めた。

「実はちょっと困った事がおきたんだ」

「困った事？」

「僕が遊び場にしている耕平さんの車が、役所に取り壊^{こわ}され
そうなんだ」

「耕平さんて、ホームレスの人だろ、君と仲のいい」

「ホームレスじゃないよ」

僕は言った。

「似たようなもんだろ、でもそれは大変だね」

常太郎は、眉毛を寄せて気の毒そうな顔をした。

「それで僕に話を聞いてもらいたくて来た訳か」

「なんとかならないかな」

「なんともならないね」

「冷たい奴だな」

「無理だね、僕は二歳のがきんちょなんだぞ」

常太郎はうでぐ腕組みをして僕を見た。

こいつのどこが二歳のがきんちょなんだ、まるでおっさんじゃないか。僕は思った。

「僕は知ってるんだぞ、君が、まわりのみんなに色んな事を思い込ませることが出来るのを」

「催眠術と言って欲しいな、それに別に他人の頭の中をコントロール出来るわけじゃない、僕に関してだけだ」

常太郎は、これから降り掛かるかもしれないめいわく迷惑な話に身構えた様子だった。

「なんとかしてくれ」

僕はさいど再度言った。

「だいたい僕がなんで、その耕平さんとかを助けなくちゃならないんだ、顔も知らないのに」

「^{かわいそう}可哀想だと思わないのかい」

「そりゃ思うけど」

僕はもう一^{ひと}押しだと思った。

常太郎は、腕組みをしたまま首をひねって思案していたが、
とうとう「^{しかた}仕方ないな」と言った。

「すまないな」

「で、どうすればいいの」

「耕平さんに成り代わって、役所の人と交渉して欲しいんだ」

「^{いつ}何時？」

「来週の今日だよ、午前中、それも早い方がいいな」

「じゃあ、それまでに何とかして耕平さんの写真を手に入れておいてくれよ」

耕平さんの車には僕が入れるすき間が一か所ある、なんとか
かなるだろうと僕は思った。

当日の朝、僕は何時ものようにじーじの家を出ると、常太郎を迎えに行った。

僕が常太郎の家の前で鳴いていると、常太郎がドアを開けて出てきた。

出て来たのは常太郎のはずなのだが、そこにいるのは^{まぎ}紛れもなく耕平さんだった。ただし、やけにパリッとしている。

「ちょっと立派^{りっぱす}過ぎやしないか」

「こんなもんじゃないのか」

常太郎は頭を^か掻きながら言った。

「こんな立派なホームレスはいないよ」

僕は言った。

「ホームレスじゃないと言ったのは君だろ」

「見かけはホームレスなんだから

^{しかた}仕方ないよ」

「難^{むつか}しい事を言うんだな」

常太郎がぶつぶつ言うと、耕平さんの姿は急によれっとしたが、まだ何か^{ものた}物足りなかった。

「ネクタイはいらないだろう」

「人に会うのにネクタイなしじゃ



しつれい
失礼だろう」

パパの受け売りかな、と僕は思った。

「とにかくそいつはいらない」

僕達は下町の街路^{がいろ}を、歩いて河川敷に向かった。

常太郎と僕はやけにのろのろと歩いた。

「もっと早く歩けないのか」

ゆっくり過ぎるペースで歩く常太郎に、僕は言った。

「仕方ないだろ、君たちには耕平さんに見えてるかもしれないけど、実際は僕のままだから。これでも結構^{けっこう}いそいでるんだぜ」

なるほど、と僕は納得した。

「ところで、ママには何て言って出て来たんだ」

僕は、さっきから気になっていたことを聞いた。

「ママは、僕が隣の部屋で寝ていると思っているさ」

常太郎は振り向きもせずに答えた。

「いつまでも寝てて怪^{あや}しまれないか」

「大丈夫だよ、あの人はうるさい奴が寝ててくれて、落ち着いて家事ができるってんで大喜びさ」

僕達はモタモタと路地を歩き、大通りを渡り、目指す河川敷にやってきた。

耕平さんのワゴン車が置いてある河川敷には、既に^{すで}にクレーン車が来っていて、道の向こうから耕平さんの車を釣り上げる準備をしていた。

そのすぐ側に、このあいだ来ていた役所の二人も、ヘルメットを^{かぶ}って立っているのが見えた。

僕達は、それには見向きもせずに、真っ直ぐに耕平さんの車に向かって歩いた。

僕達が車にたどりつく と、役所の二人が血相を変えてすぐ^{あと}後を追いかけて来た。

「ちょっとすみません」

若い方の男が、常太郎の耕平さんに声を掛けた。

「すみません、おたくどちらさんですか」

二人は明らかに^{こんわく}困惑している様子だった。

「どちらさんて、僕はここの住人ですよ」

常太郎は答えた。

役所の二人は顔を見合わせた。

「あの、貼り紙をしてたんですが、見て頂けましたか」

年配の男が丁寧な口調で言った。

「いや、見てないよ、旅行に行ってて今帰ったばかりだから」

常太郎は平然と答えた。

「ここに住んでるんですか」

「だからこの住人だと言ったでしょう」

常太郎の耕平さんは不服そうな顔をした。

役所の二人は、常太郎の耕平さんの姿をじろじろと見て、それから少し離れたところでなにやら話し合った後で戻ってきた。

「おたくさん、ここが国の土地だってわかってました」

年配の男が、今度は少し高飛車な口調で聞いた。

「いや、知らないな、ここに居ちゃいけないの」

常太郎は言った。

「そりゃそうですよ、だからちょっと車をどかしでもらえませんか」

年配の男が言った。

「そうしてあげたいんだけど、この車は壊れてて動かないん

だ、だからナンバーも失効^{しっこう}してるしね」

常太郎の耕平さんは、さも困ったような顔をし、気の毒そうに言った。

二人の男はそれを聞くと、小さく「えっ」と言ったまま口をつぐんでしまった。

常太郎の耕平さんは、いかにも所在無^{しょうざいな}げといった様子でそこに立っていた。僕は、その姿が可笑^{おか}しくてしょうがなかった。

暫く、その三人と僕はその場に立ちすくんでいたが、やがて役所の年配の男が口を開いた。

「失礼ですけど、おたくさんホームレスでしょう。こちらでもっといい施設を用意しますから、そちらに移りませんか、ここよりはずっと快適ですよ、それがいいと思いますけど。ね、そうしましょう」

年配の男は、いい話だといわんばかりに猫なで声で常太郎の耕平さんに言った。

「ありがたい話なんだけど、僕はここが気に入ってるし、仕事場も近いしね」

常太郎はますます気の毒そうに言った。

そして、役所の二人はこの上もなく不幸な顔になった。

「つまり、どいていただけないと」

「いまのところは、ちょっと無理ですね」

二人は、「わかりました。でもここは国の土地なんですからね、^{そうきゅう}早急に出てってくださいよ」と言い残して帰って行ったのだった。

僕は、彼らが引き上げていくのを見^{みまも}守りながら、本当の耕平さんだったらこうはいかないだろうな、と思った。ちびのくせにたいした奴だ

僕達は、もと来た道を帰って行った。

途中、常太郎は横断歩道の階段で苦勞をしていた。なにしろ足が短いので一段一段が大変なのだ。本人は、最近足が伸びたと言っているが。

常太郎は家に帰ると、疲れ果ててそのまま寝込んでしまい、夕方まで寝ていた。したがって、はた目には^{ゆうべ}昨夜からずっと寝ていたことになる。

僕は、これで常太郎に大きな借りができてしまったのだっ

た。

それから一週間程して、耕平さんは何事^{なにごと}もなかったように帰ってきた。

耕平さんは、何時ものように自分の家のワゴン車で生活し、これまでのように仕事に出かけ、夕方もしくは仕事が済んだ時間に帰ってきた。

耕平さんは、自分の居場所がある沖縄に出掛け、幸せな時間を過ごし帰ってくる。そうやって人生の時を^{きざ}刻んでいる。それはそれでとても素晴らしい人生で、僕達は、耕平さんが帰ってくる場所が無くならなかったことは、とても良かったと思っているのだった。



